

ほしおいびと

isinglass

## ほしのまちのこと

---

むかーし、むかしのそのまたむかし。きみたちがうまれるよりも ずっとむかし。

そらのむこうに、おほしさまとくらすひとたちがすむという、ちいさなまちがありました。ちいさなまちでは、だれもが、じぶんのおほしさまをもっていて、よるになると、それぞれのへやのまどへ、そのおほしさまをかかげました。

おほしさまは、よるのあいだ、それぞれのまどから、きらりきらりとひかります。そのひかりは、しずくとなって、きらりきらりとおちてゆき、そらのかわへとながれました。そらのかわへとながれたひかりは、きらりきらりとあつまって、そらのうみへとたびだつのです。

そらのうみは、とてもとてもとおく、てんたかくにありました。きみたちが、よぞらを見あげると、きらりきらりとひかる、そらのうみがみえるでしょう？ そのひとつひとつのひかりは、ちいさなまちからたびだった、ちいさなちいさなしずくなのです。

## おとこのこのこと

---

そらのむこうのちいさなまちに、ちいさなおとこのこがすんでいました。  
でも、おとこのこには、じぶんのおほしさまがありません。  
どうしてじぶんのおほしさまがないのかと、おとこのこはききました。

おとなにきいても、こたえはわかりません。  
ともだちにきいても、こたえはわかりません。  
みんな、じぶんのほしをもっていたからです。

どうやってそのおほしさまをてにいれたか、きいても、だれもしりません。  
だれもがみんな、じぶんのおほしさまは、じぶんといっしょにあったからです。  
おとこのこは、まいばんまいばん、おほしさまをおもってなきました。

どうしてぼくにはおほしさまがないんだろう。  
どうしてぼくのおほしさまはここにはないんだろう。  
どうしてぼくだけがひとりなんだろう。

## ほしをさがすこと

---

あるとき、おとこのこは、けっしんしました。  
ぼくのおほしさまがここにはないのなら、ぼくのおほしさまは、ぼくがさがしにいったらいい。  
ぼくだけのおほしさまが、きっとどこかでまっているはずだ。

たびだちのひ、まちのどのまどにも、おほしさまはありました。  
まどのむこうで おほしさまは、おとこのこにむかって、きらりきらりとかがやいて、おとこのこにゆうきをくれました。

だから、おとこのこは、ちいさなまちをたびだちました。  
ちいさなちいさなふねにのり、ちいさなちいさなかいをもち、ちいさなちいさならんぷをつるして、ながいながいたびにでました。

おとこのこはそらのもりをさがしにいきました。  
おとこのこはそらのうみをさがしにいきました。  
おとこのこはそらのしたをさがしにいきました。

## たびのおわりのこと

---

ながいながいたびのすえ、おとこのこはおほしさまにであいました。  
おほしさまはうれしそうにして、ぽろりぽろりとひかりのしずくをこぼしました。  
おとこのことおなじように、おほしさまも ながいながいたびをしていたのです。

そらのむこうのちいさなまちから、とおくとおくはなれたそらのした、  
おとこのこは、じぶんだけのおほしさまにであいました。  
おほしさまとふねにのり、ちいさなまちへかえりました。

おとこのことおほしさまは、ちいさなまちで、なかよくなかよくくらすでしょう。  
おほしさまのいない、そのきみ。  
きみのおほしさまも、とおいとおいせかいのはてで、きみをさがしているかもしれないね。

それはむかしむかしのものがたり。

その昔、もしかしたら、これから未来。

空の向こうに、星と暮らす星守りが住むという、小さな町がありました。

その星守りの町では、誰もが「自分の星」を連れていて、星と仲良く暮らしていました。

朝は星と共に起き、昼に星と共に働き、夜は星を窓辺に掲げ眠りにつきます。

窓辺に掲げられた星たちは、夜の間、それぞれの窓からキラリキラリとひかるのでした。

その光はしずくとなって、キラリキラリと落ちてゆき、集まって、空の川を作り、流れ、また集まって、空の海へと旅立ちました。

光のしずくが旅立った空の海は、とてもとても遠く、そして天高くにあります。

もし夜空を見上げる事があったなら、目を凝らして、夜空を見上げれば、キラリキラリと瞬き光る、空の海を見ることができはずです。

その1つ1つの光は、星守りの小さな町から旅立った、小さな小さなしずくなのです。

その空の向こうの星守りの町に、少年が独り暮らしていました。

少年には、「自分の星」がありません。どうして無いのか、いつから無いのか、少年は知りません。

少年が、気がついたときには既に無く、どうして「自分の星」がないのかと聞きました。

大人に聞いても、友達に聞いても、答えは分かりません。

みんな「自分の星」を持っていて、なくした者など1人としていなかったからです。

どうやって、「自分の星」を手に入れたか、聞いても誰も知りません。

誰もがみな、「自分の星」は、気がついたときからずっと、自分と共にあったからです。

少年は、「自分の星」を思って泣きました。

どうして僕には「自分の星」がないんだろう。

どうして僕の「自分の星」はここにはないんだろう。

どうして僕だけが独りなんだろう、と。

けれど、ある時、少年は決心しました。

僕の「自分の星」がここにはないのなら、僕の「自分の星」は、僕が自分で探しに行ったらいいじゃないか。

僕だけの「自分の星」が、きっと、どこかで僕を待っているはずだ、と。

旅立ちの日、町のどの窓にも、誰かの「自分の星」が光っていました。

窓の向こうで、誰かの星は、少年に向かってキラリキラリと輝いて、少年に勇気を与えました。

だから、少年は、小さな星守りの町を旅立ちました。

少年がやっと乗れる小さな舟に乗り、その手に小さな櫂を持ち、「自分の星」の代わりに小さなランプを舳先に吊るして、長い長い旅が始まりました。

町の近くの空の森、川を下って空の海、そして、海の溢れた先の空の下、行ける場所には全て行き、話を聞けるものには話を聞き、ただ「自分の星」だけを信じて、少年は探し続けました。

そして、長い長い旅の末に、少年は「自分の星」に出会いました。

「自分の星」は嬉しそうに瞬いて、ぽろりぽろりと光のしずくを零しました。

少年と同じように、長い長い旅をしていたのです。

空の向こうの小さな星守りの町から、遠く遠く離れた空の下で、少年は自分だけの「自分の星」に出会いました。

少年は、星と共に舟に乗り、星守りの町へ帰りました。

そして未永く、共に暮らしたと伝えられています。

ここまで、拙い文章にお付き合いくださいまして、ありがとうございました。  
もう少しだけお付き合いいただけますと幸いです。

そもそも、このお話は、絵本を想定して書いた物語でした。  
ある物語の主人公が、星を探し、星を追い、旅をする、そのきっかけとなった絵本です。  
本当にあったかもしれないし、ただの作り話かもしれないし、ただ、大人が、子供に向けて、話の本質を包み隠したまま、いろいろな願いや思いを伝える絵本です。

ほぼ同じ内容の話を、絵本としてひらがなで、読み物として漢字交じりで書きました。  
私にとって、とても大切な大切な主人公と絵本だったので、もう何年もしまいつづけてきたもの  
です。  
どちらかでも、ワンフレーズでも、何か残るものになったならいいなあと思います。

お付き合いありがとうございました。